

幼児の親が抱く子供の意味と価値

山 口 雅 史*

The meanings and values of children in thier parents.

Masafumi YAMAGUCHI

問 題

ヒトは数百万年にわたり子を産み育て、世代交代をくり返してきた。種保存の欲求に基づくと考えられる子産みや子育てという行為を、認知機能を高度に発達させた我々はどうのように認知し解釈してきたのだろうか。おそらく子供や子供を持つことに対して何らかの高い価値を見出したからこそ、子を産み育てるという行為が綿々と続いてきたのであろう。であるならば、近年のわが国における少子化傾向は子供や子供を持つことに対する価値が揺らいでいることの表れだと考えることもできるのではないだろうか。現代を生きるヒトの親達は子供や子供を持つことにどのような意味や価値を見出しているのだろうか。

女性が子供を産む理由や動機について検討した柏木・永久（1999）は、子産みの動機として、「情緒的価値」「条件依存」「自分のための価値」「社会的価値」「子育て支援」の5つの因子を明らかにした。ただ、このうち「条件依存」は「経済的ゆとりができたので」「夫婦関係が安定した」等の項目から構成される因子で、子産みの動機というよりも子産みを決意するための条件と捉えるべきものであろう。同様に「住宅事情が整ったので」「よい保育園があったので」等で構成される「子育て支援」も、子育て支援の条件が整ったことにより子産みを決意している点でやはり子産みの条件として理解する方が自然である。これらを除いた残り3つの因子からは、子供に対してというよりもむしろ子を産み育てるという行為に対して母親が何を期待しているのかを読み取ることができる。

例えば、「家庭がにぎやかになる」「子供を持つことで夫婦の絆が強まる」等の項目で構成された「情緒的価値」からは、夫婦や家族の絆を強め、家族集団をまとめるための求心力を子を産み育てるという行為に期待していることがわかる。「自分のための価値」には「子育てで自分が成長する」「女性として妊娠、出産を経験したかった」という項目が含まれているが、ここからは女性が子育てや妊娠・出産に対してあこがれを持っていること、そしてそのあこがれを成就させることを子を産み育てるという行為に期待している様子がうかがえる。さらに、「子を産み育ててこそ一人前の女性」「次の世代を作るのは人としての

* 人間関係学部 心理学科

つとめ」等の項目からなる「社会的価値」は、子を産み育てることが社会的に付与された価値観を反映し、先祖から続く血筋や家系の一構成員としての自己の位置づけを確認することを期待している姿を見て取ることができる。

同様に、永久・柏木・姜（2004）は父親を対象として子産みの理由や動機について調査を行い、3つの因子を抽出している。1つめは柏木・永久の子育て援助因子に相当する項目を含んだ「条件依存」、2つめは「自分のための価値」、3つめは柏木・永久の情緒的価値因子を含んだ「社会的価値」である。

このように、子を産み育てることを親が決定する理由や条件については研究が行われているが、子供あるいは子供を持つことに対して親がどのような意味や価値を見出しているのかについてはいまだ明確な知見は得られていない。

筆者はこれまで、親になる過程を親同一性という視点から検討を加える中で（山口、1997；山口、2001；山口、2003）、子供を育てることが自分にとってどのような意味を持っているのかについて、母親、父親それぞれを対象に検討してきた（山口、2005；山口、2006）。

本報告は、子供という存在を親がどのように定義し、子供に対してどのような意味や価値を抱いているのかを検討する一連の研究の一部である。今回は、父親を対象に分析した山口（2017）のデータに母親のデータを加えて再分析を行い、父親、母親間でどのような相違があるのかを明らかにすることを目的としている。

方 法

(1) 調査内容

「次の文章は未完成です。あなたの気持ちにぴったり合うような、好きな文章を続けて完成させてください」という教示のもと、「子供とは、」という語の後に下線だけ引いた空欄を設け、自由に記述させる文章完成法を用い、回答させた。

(2) 調査手続き

調査は、愛知県名古屋市の公立幼稚園1園、愛知県岡崎市の私立幼稚園1園の在園児の母親及び父親を対象として実施した。調査実施時期は2004年10月である。

本調査は複数の調査項目をまとめて1つの調査票にしたものの一部として実施し、各担任を通じて配布回収するという手続きを取った。372部を配布し回収したのは280部で、回収率は75.3%であった。回収した280部のうち回答に不備のあった11部に関しては分析から除外し、残り269部について分析の対象とした。

(3) 回答者の属性

母親の年齢は26歳から46歳（平均35.1歳）、子供の数は1人から4人（平均2.0人）であった。長子の年齢は3歳から21歳（平均6.2歳）、末子の年齢は0歳から6歳（平均3.4歳）であった。常勤勤務者は6名（2.2%）、パートタイム勤務者は36名（13.4%）で、227名（84.4%）が就労していなかった。最終学歴は、中学・高校卒61名（22.7%）、専門学校・短期大学卒116名（43.1%）、大学・大学院卒92名（34.2%）であった。

幼児の親が抱く子供の意味と価値

父親の年齢は26歳から55歳(平均37.8歳)で、常勤勤務者は267名(99.3%)で、1名(0.4%)が就労していなかった。最終学歴は、中学・高校卒68名(25.3%)、専門学校・短期大学卒27名(10.0%)、大学・大学院卒174名(64.7%)であった。

結果及び考察

母親、父親それぞれが子供という存在をどのように意味づけ定義しているのか、記述された内容の分析を通して検討した。回答は文章を記述する形式でなされたため複数の意味内容を含んでいる場合がある。その場合は意味内容を変えない範囲で文章を分割し、一つの切片には一つの意味内容しか含まないように留意しつつ複数の切片に切り分けた。したがって分類に使用した切片化された記述の総数は母親で424、父親で343となり、対象者数269(無回答は、母親で5、父親で19)を上回っている。

切片化された記述を1つの単位として意味内容の類似性に基づき分類を行った。全部で25のカテゴリーに分類され、さらにそれらは7つのカテゴリー群に統合された(Table 1 参

Table 1 切片化された記述の分類

カテゴリー群	カテゴリー	母親	父親	合計
無条件の価値	宝物	65	51	116
	大切なもの	30	15	45
	愛おしいもの	29	12	41
	社会の宝物	10	7	17
	守るべきもの	9	2	11
	授かりもの	7	—	7
	小計	150 (35.4)	87 (25.4)	237 (30.9)
心理的価値	親を成長させるもの	25	13	38
	親を幸せにするもの	21	12	33
	親の生きがい	20	26	46
	親を映す鏡	16	36	52
	小計	82 (19.3)	87 (25.4)	169 (22.0)
親と独立した存在	個別の人格	31	16	47
	不思議なもの	24	11	35
	純粋なもの	20	7	27
	人間の原点	—	4	4
	小計	75 (17.7)	38 (11.1)	113 (14.7)
成長する可能性	可能性を持つもの	23	24	47
	成長しつつあるもの	18	13	31
	未来を担うもの	9	19	28
	小計	50 (11.8)	56 (16.3)	106 (13.8)
親との繋がり	親の分身	12	28	40
	家族の要	12	14	26
	育てるべきもの	10	12	22
	命をつなぐもの	4	3	7
	昔の自分	1	6	7
	小計	39 (9.2)	63 (18.4)	102 (13.3)
負の心理的価値	アンビバレントな存在	20	7	27
	手のかかるもの	4	—	4
	小計	24 (5.7)	7 (0.2)	31 (4.0)
その他	その他	4 (0.9)	5 (1.5)	9 (1.2)
合 計		424 (100.0)	343 (100.0)	767 (100.0)

※1 表中の数値は度数を表す。

※2 () 内の数値は相対度数を表す(総記述数を分母とした百分率)

Table 2 カテゴリー群ごとの母親と父親の記述数の比較

カテゴリー群	母親	父親	計
無条件の価値	150 (35.4) 3.0**	87 (25.4) - 3.0**	237 (30.9)
心理的価値	82 (19.3) - 2.0*	87 (25.4) 2.0*	169 (22.0)
親と独立した存在	75 (17.7) 2.6**	38 (11.1) - 2.6**	113 (14.7)
成長する可能性	50 (11.8) - 1.8	56 (16.3) 1.8	106 (13.8)
親との繋がり	39 (9.2) - 3.7**	63 (18.4) 3.7**	102 (13.3)
負の心理的価値	24 (5.7) 2.5*	7 (0.2) - 2.5*	31 (4.0)
その他	4 (0.9) -.7	5 (1.5) .7	9 (1.2)
計	424 (100.0)	343 (100.0)	767 (100.0)

※1 上段：度数（相対度数） 下段：調整済み残差

※2 *p<.05 **p<.01

照)。各カテゴリー群の相対度数は、母親父親ごとに記述総数に対する各カテゴリーに分類された記述数の割合で示してある。なお、本文中〈 〉の語はカテゴリーを、《 》の語はカテゴリー群を表す。また、『 』の語は回答に記述された語句を表す。

1. カテゴリー群のクロス集計表の分析

《無条件の価値》《心理的価値》《親と独立した存在》《成長する可能性》《親との繋がり》《負の心理的価値》《その他》の7つのカテゴリー群の記述数を母親、父親別に記載した(Table 2)。これに基づき χ^2 検定を行った結果、記述数の偏りは有意であった($\chi^2(6) = 36.28$, $p < .01$)。残差分析を行ったところ、《無条件の価値》《親と独立した存在》《負の心理的価値》の3つのカテゴリー群では母親の記述数が多く、逆に《心理的価値》《親との繋がり》の2つのカテゴリー群では父親の記述数が多いという結果が得られた(調整済み残差はTable 2参照)。

2. カテゴリー群ごとの分析

以下、カテゴリー群ごとに考察を行っていく。

(1) 無条件の価値

このカテゴリー群には〈宝物〉〈大切なもの〉〈愛おしいもの〉〈社会の宝物〉〈守るべきもの〉〈授かりもの〉の6つのカテゴリーを分類した。いずれも対価や見返り等の条件なしに子供を大切な存在であるとする記述が見られ、無条件の価値を持つ存在として子供を意味づけていることからこのカテゴリー群を《無条件の価値》と名づけた。母親、父親を合算した記述数が7つのカテゴリー群の中でもっとも多い。

中でも〈宝物〉は母親で68、父親で51と全カテゴリーの中でも群を抜いて記述数が多い。

『宝物』という語に『かけがえのない』や『何物にも代えられない』等の修飾語が附されているものも多く、子供という存在がいかに大切なものとして受けとめられているかがうかがえる。ついで記述数の多かった〈大切なもの〉でも『かけがえのない存在』『なくてはならないもの』という記述が見られ、子供は親にとって存在そのものが何物にも変えがたい価値を持っていることを示唆している。同様に、〈愛おしいもの〉〈守るべきもの〉も子供がもたらすであろう何らかの利益を期待してではなく、子供の存在自体に価値を見出し、肯定的な言葉を用いて定義している。

柏木・永久（1999）や永久ら（2004）も親が子供に何らかの価値を見出していることを指摘しているが、山口（2017）でも触れたように、彼女らが明らかにした価値は、子供があるいは子供を持つことが親に対して何らかの利益をもたらすことを前提としたものであった。例えば「情緒的価値」は家族や家庭に求心力をもたらすことを子供に期待したものであり、「個人的価値」は子供を育ててみたかったという個人的動機に動かされたもの、「社会的価値」は社会的存在としての自己の位置づけを確認しようとする親の思いによるものととらえることができる。しかし、本カテゴリー群に分類された記述からはそういった功利的な前提条件はいっさいうかがえない。いずれも何らかの条件や期待なしに子供に価値を見出しており、このような指摘は柏木・永久（1999）、永久ら（2004）のいずれでもなされていない。

このように子供に対して無条件の価値を見出す傾向は父親よりも母親に強く見られ（ $p < .05$ ）、母親の総記述数の35.0%の記述が何らかの形で無条件の価値について触れている。これを記述数ではなく回答者数で見ると、母親の49.6%、父親の31.3%となり、実に半数の母親が子供に無条件の価値を見出していることになる。他のカテゴリー群では回答者数が多くても25%程度であることを考えると、この割合は群を抜いている。もしかしたら、その背景には「親は子供を無条件に大切にしなければならない」という社会通念のようなものがあり、それが親、特に母親により強く影響を与えているのかもしれない。

大日向（2000）が母性愛神話と呼んだ「子育てへの献身を含めて母性愛の崇高な面だけを賛美する風潮」は、様々な形で母親達に影響を与えていることが明らかにされている。その流れを汲み「社会通念としての母性愛を受け入れて信じ込む傾向」を「母性愛」信奉傾向と定義した江上（2005）は、「母性愛」信奉傾向尺度を作成し様々な検討を行っている。その尺度項目として選ばれた文言を見てみると、「子供のためならどんなことでもするつもりでいるのが母親である」や「子供のためならたいいのことは我慢できるのが母親である」等、子供という存在を無条件で受け入れ、子供のためなら自己犠牲をもちとわなないという意識が「母性愛」信奉傾向を形作ると考えられていることがわかる。

ここから推測すると、母性愛に関する社会通念の一部には「子供とは無条件で価値のあるものである」という信念や「親は子供を無条件で尊重しなければならない」という暗黙の社会的な圧力などが包含されていることも十分に考えられる。その結果、「母性愛」信奉傾向が高いとされる専業主婦が8割以上を占める本研究では、多くの母親が父親よりも子供に無条件の価値を見出すという結果になったのかもしれない（ $p < .05$ ）。

この点に関しては、子供の価値を喩えるのに多くの親が「宝物」という語を選択している点も無関係ではあるまい。「銀も金も玉もなにせむに勝れる宝子に及かめやも」という山上憶良の歌に見られるように、万葉の時代から我が国に伝わる子供を宝とみる子宝思想

が本研究の対象にも影響を与えており、それが子供に無条件の価値を見出させているのではないだろうか。

(2) 心理的価値

このカテゴリー群には〈親を成長させるもの〉〈親を幸せにするもの〉〈親の生きがい〉〈親を映す鏡〉の4つのカテゴリーが含まれる。いずれも親にとって精神的な面で何らかの利益をもたらす存在として子供を意味づけていることから《心理的価値》と命名した。母親の記述数では2番目に多く、父親では《無条件の価値》と同数で1位であった。

このうち〈親を成長させるもの〉の記述からは、子供は親を成長させてくれる存在であり、子育てという行為は親自身の成長を促進するという実感を抱いている様子が見ええる。『多面的に自分を知ることができる』『自分の長所、短所を教えてくれる』等の記述を読むと、子育ては親が自己を反省的に見直す契機となっているようである。

同様の傾向は〈親を映す鏡〉の記述からも読みとれる。ここでは『親の鏡』『自分を映す鏡』等、『鏡』という語が好んで使用されているが、子供に投影された自己の姿を見つめることで自身の態度や行為を反省的に考えるという比喩的な意味で用いられている。

この2つのカテゴリーからは、子育てが親自身の心理的な成長を促す良い機会であると考えられていることがわかる。この傾向は、親になることによる発達を検討した森下(2006)や高橋・高橋(2008)にも見られ、尺度で使用された「自分の性格や考えを見つめ直すようになった」という項目が、いずれの調査でも「子供を通しての視野の広がり」と命名された因子を構成する1つとなっている。このことから、子育てが親に内省的な自己再評価を促すことは一般的な傾向であると考えられる。

親の発達促進という意味では〈親の生きがい〉も同様の傾向であろう。ここには『生きがい』『パワーの源』『カンフル剤』等の言葉が並び、子供が人生の励みとなり日々の仕事や生活への動機を高めてくれていることをうかがわせる。子育てが親の生きがいとなり、また子育てによって親の成長が促されるという考え方は、柏木・永久(1999)が母親の子産みの理由の1つとした「自分のための価値(子育ては生き甲斐になる、子育てで自分が成長する等)」や、父親を対象とした永久ら(2004)の「自分のための価値(子育てはやりがいのある仕事、自分の成長等)」とも共通している。

このカテゴリー群の記述からは、子供という存在を無条件に価値あるものとするのではなく、親の発達を促進するという有益性を持っているが故に子供に価値を見出している親の姿が見ええる。ただし、それはあくまでも心理面での有益性であって、物質面での有益性についての言及はまったくなかった。

心理面で有益性を持つという点では同じでも、親の発達を促進するという点とは少し違った方向性を持つ記述も見られた。それが、〈親を幸せにするもの〉である。例えば『幸せを感じさせる』『疲れた心を癒してくれる』等、親の疲れた心を癒し、リフレッシュしてくれる存在として子供をとらえている。視野を広げたり、生きがいを提供したりと親の意欲を高める効果ばかりではなく、幸福感や安らぎをもたらすといった親の心を癒す効果も子供の持つ心理的価値には含まれているようである。

この《心理的価値》に分類された記述は《無条件の価値》とは逆に、母親よりも父親の記述に多く見られるという結果となった($p < .05$)。《無条件の価値》では理屈は一切抜き

で子供には価値があると考えていたのに対し、『心理的価値』では子供という存在が内省的な自己再評価を促している様を分析的にとらえ、それが親に対して有益性をもつことを指摘することで子供を定義している。つまり、子供を親自身の発達を促進する存在として定義するには、自らの子育てを冷静で客観的な視点から見直す必要があるのである。

本調査の母親は、約8割が専業主婦として子育てにあたっている。有職の母親より専業主婦の母親の方が育児不安や育児ストレスが高く（牧野、1982；牧野・中西、1985；山口、2004）、生活満足度も低い（土肥・広沢・田中、1990）という報告を考えると、子育てに直接的に関与している母親は関与度の低い父親に比べると、子供や子育てから距離をとって子供の意味や価値を冷静に評価することが難しい状況に置かれているのかもしれない。そのことが『心理的価値』における母親、父親間の差異となって表れたのではないだろうか。

（3）親と独立した存在

このカテゴリー群には〈個別の人格〉〈不思議なもの〉〈純粋なもの〉〈人間の原点〉の4カテゴリーを分類した。いずれの記述も、子供は独自の人格を持った存在であり、親とは独立した存在、あるいは異質な存在として意味づけているため、このカテゴリー群を『親と独立した存在』と命名した。これまでの2つのカテゴリー群がどのような価値を持つかという視点から子供を定義していたのに対し、このカテゴリー群では価値ではなく子供という存在の有り様という点から定義が行われている。

中でももっとも記述数が多いカテゴリーは〈個別の人格〉である。『まったく別の一個人』『独立した人格』等、子供が独立した人格を持つ存在であることを強調する記述が多く見られる。興味深いのは人格の独立性を表現する際、『親の所有物ではない』『親の思い通りにはならない』というように、子供の意志を親が統制することは難しい（あるいは、すべきではない）と指摘する記述が目立つ点である。この傾向は母親に多く見られ、本カテゴリーに分類された母親の記述の45%にこの指摘が見られた（父親では12%）。本研究のほとんどの母親が専業主婦として子育てに直接的に関与していることを考えると、母親達は日々の子育ての中で、自分の意志と子供の意志とが食い違う場面を数多く経験しているのではないだろうか。その経験が、子供は自分（親）とはまったく別の意志を持つ人間であるという実感をもたらしているのかもしれない。

次に記述数が多いのは『無邪気で純真』『まっ白』等の〈純粋なもの〉である。父親の記述は母親に比べ極端に少なく、その内容も『まっ白なハードディスク』『非常に繊細な心を持っている』等、子供の心が何ものにも染まっていない状態であることを中立的な表現で述べるに留まっている。一方、母親の記述には『純粋』という表現に『無邪気』『素直』『正直』等の語を組み合わせたものが多く、未成熟であるが故の純粋さを肯定的にとらえ、価値のあるものとして意味づけているように思われる。

この母親父親間の対比は〈人間の原点〉が父親だけにしか見られないこととも通じるように思われる。ここでは、子供を『人間の原点』『あたりまえに存在しているもの』として何ら特別な存在ではないと淡々と記述されており、情緒的に巻き込まれることなく冷静で客観的な視点で子供の存在を意味づけている。この視点もまた子育てへの関与度の低さから生じているのかもしれない。

〈不思議なもの〉には『未知の存在』『不思議な生き物』等の記述が見られる。これらの記述からは、成人の常識や感性では予測できない子供の言動を理解しがたいとしつつも肯定的に受けとめている様子がうかがえる。また、『大人とは全く異なる存在』『よくわからんもの』等の記述からは、子供という存在の持つ異質性を強く意識していることがわかる。

以上のように、〈個別の人格〉では子供のもつ個別性を意識して子供を定義しているのに対し、〈純粹なもの〉〈不思議なもの〉では子供のもつ異質性を意識した定義となっており、『親と独立した存在』というとらえ方にも差異が認められるようである。

(4) 成長する可能性

このカテゴリー群には〈可能性を持つもの〉〈成長しつつあるもの〉〈未来を担うもの〉という3つのカテゴリーをまとめた。これらはいずれも発達途上にあるという子供の特徴に着目し、その潜在的な発達可能性をもとに子供という存在を定義していることから『成長する可能性』と名づけた。母親父親とも記述数では4位に位置づけられ、父母間での有意差は見られなかった。

もっとも記述数の多い〈可能性を持つもの〉は、『無限の可能性を秘めた』『未知の可能性を持った』等、これから成長していくであろう子供達の持つ将来の可能性についての記述をまとめたものである。そこには『すばらしい』『輝ける』『宝石の原石』等の言葉が添えられ、希望と期待に満ちた可能性を思い描いている様が見て取れる。

この〈可能性を持つもの〉が個人内に潜在する可能性を主眼とした定義であるのに対し、〈未来を担うもの〉に分類されているのは、子供という存在が人間社会全体に希望や幸福をもたらしてくれる可能性に着目した記述である。『将来の希望』『未来への種子』と、明るい次世代を託す存在として子供の持つ可能性に期待を寄せている。

このように成長する子供の姿に肯定的な価値を見出している記述がある一方、『大人になるための準備期間』『未完成の人間』等あくまでも発達の途上であるという事実を淡々と述べた記述もあり、これらは〈成長しつつあるもの〉としてまとめた。

(5) 親との繋がり

このカテゴリー群は、親と子の間にある様々な結びつきという視点から子供という存在を意味づけている〈親の分身〉〈家族の要〉〈育てるべきもの〉〈昔の自分〉〈命をつなぐもの〉の5つのカテゴリーをまとめ、『親との繋がり』と命名した。『親と独立した存在』と同様、これもまた子供の持つ価値ではなく子供という存在の有り様、親との関係性という視点から子供を意味づけているカテゴリー群である。

もっとも記述が多かったのは『自分の分身』『自分の生まれ変わり』等の記述を集めた〈親の分身〉である。父親の記述数だけで言えば〈宝物〉〈親を映す鏡〉に継いで3番目に多い。『分身』という語が好んで用いられており、自己の遺伝子を継承し、自身によく似た容姿や性格、態度などを持つ存在として子供を定義している。柏木・若松(1994)でも、子供を分身と感ずる程度は母親より父親で高いという結果が得られており、本研究の知見と一致している。

表現を詳細に検討すると、『自分の生き写しのような』『自身のミニチュア』という表現が父親の記述に認められ、容姿や性格が自分に似ているという視点から子供を自分の分身

と意味づけている。一方、母親の記述には『私の体の一部』『私のお腹から出てきた』という自身の身体を引き合いに出した表現が複数の記述に見られ、文字通り身を分けた存在として子供をとらえている様子がうかがえる。妊娠、出産という生物学的かつ身体的な体験の末に子供を得た母親と、それを観念的にしか体験できない父親との実感の差異が、父母間の子供を巡るこのような感覚の違いを生みだしているのかもしれない。

次に記述の多いカテゴリーである〈家族の要〉には、『家族の絆を深める』『かすがい』等の記述が見られ、子供が家族の中心に位置し、夫婦や家族を結びつける絆としての意味を持つと考えられていることが読みとれる。〈親の分身〉に見られた親と子の個別的な結びつきとは違い、家族という集団が結びつくための求心力を持つ存在として子供を意味づけており、柏木・永久(1999)の「情緒的価値」に通じるものがある。

〈育てるべきもの〉では、親が責任を持って守り教育し育てていかななくてはならない存在として子供を定義している。例えば『親の助けを受けて、自分の道を歩いていく』『教え、教育していくべき』等であり、子供に対する親の責任という形で意識された親と子の関係性に基づいて子供という存在を意味づけている。

『自分の遺伝子を持つ』『命のつながり』等、未来に向けて自分の遺伝子を継いでくれる存在として子供をとらえている記述を集めたのが〈命をつなぐもの〉である。逆に過去に思いをはせ、子供の姿に親自身の昔の姿を重ねた『私が小さかった頃そのもの』や『昔の自分達』等の記述は〈昔の自分〉として分類した。自己の遺伝子を未来へ継承してくれる存在としての子供と、子供だった過去の自己の特徴を色濃く受け継いでいる子供。これもまた、長い時間軸の上での親と子という関係性を意識した子供の定義と言えよう。

以上のように、このカテゴリー群はいずれも親と子の関係性という抽象的な概念に基づいて子供という存在を定義しようとしている。例えば、〈親の分身〉では自分を含めた親子を客観的視点から見てその相似点を見出しているし、〈家族の要〉では家族成員の関係性や家族のあり方など家族集団のダイナミクスをイメージし子供という存在を位置づけている。〈育てるべきもの〉では、親子という関係性を根拠とした責任や義務を意識することで子供を定義し、〈命をつなぐもの〉や〈昔の自分〉では、過去から未来へと続く時間軸に沿って自身が子供だった過去や子供が大人になっていくであろう未来に思いをはせ、子供という存在を理解しようとしているのだ。

このように抽象的かつ観念的に子供という存在を定義する傾向は、このカテゴリー群の記述が母親よりも父親の方が多い($p < .05$)という結果とも無関係ではあるまい。これまでも触れたように対象とした母親のほとんどが専業主婦である本研究では、子育ての直接的な関与者はおそらく母親であろう。逆に、一家の収入源としてフルタイムで就労している父親は子供とかかわる時間も短く、子育てへの関与度も低いと考えられる。直接的に子供と接触する時間が短い父親達が子供という存在を意味づけようとしたとき、直感的・身体感覚的にではなく論理的・観念的に定義せざるを得なかったのではないだろうか。そのことが本カテゴリー群で父親の記述が多いという結果につながったのであろう。

(6) 負の心理的価値

このカテゴリー群には〈アンビバレントな存在〉〈手のかかるもの〉という2つのカテゴリーをまとめた。いずれも子供についての否定的な表現がなされ、親にとっての負担や

苦勞についての言及が多いため《負の心理的価値》と命名した。

子供について否定的な表現で記述されたものを読むと、ほとんどがそれと反対の肯定的な表現と組み合わせて記述されている。例えば、『宝物でもあり、負担でもある』『天使でもあり、悪魔でもあり』『癒やしのもとでもあるが、苦しみの中でもある』等、子供という対象に対して相反する感情を同時に抱いている状態、いわゆるアンビバレントな状態が表現されている。そのほとんどが母親によるものであること ($p < .05$) を考えると、子育ての直接的な関与者としての様々な体験がこのような傾向を導いていることは想像に難くない。〈手のかかるもの〉として否定的な表現だけで記述したものも若干見られたが、これもすべて母親による記述であり、同様のことが言えるのかもしれない。

専業主婦の母親は育児ストレスが高く生活満足度も低いという先行研究の知見と同様、本研究の母親達も多様な育児ストレスにさらされているのであろう。それでも、子供や子育てに対して生じた否定的な思いをそれとは逆の肯定的な思いで相殺しながら、日々のストレスに耐え子育てを続けている姿がこのカテゴリー群には表れているように思われる。

まとめ

本研究は、親が子供という存在をどのようにとらえ、どのような意味や価値を見出しているのかを母親と父親の記述を比較することで検討した。

母親の記述数が父親を上回ったのは《無条件の価値》《親と独立した存在》《負の心理的価値》の3つのカテゴリー群であった。

子供という存在に対価を求めず《無条件の価値》を見出していることをうかがわせる記述は、母親、父親ともすべての記述の中でもっとも多かった。特に母親のほぼ半数がこのような記述を行っており、子供に無条件の価値を見出す傾向が母親で特に高いことが明らかになった。その背景として“母性愛”信奉傾向が影響していることが推測され、このことが母親の記述を父親よりも多くしている要因ではないかと考えられた。

また、本研究の対象者である母親の84.4%が専業主婦であったことから、母親の方が父親よりも子育てに深く関与している可能性が高い。この関与度の違いが、子供の意志と親の意志との齟齬を感じる機会を母親に多く提供することとなり、子供と親とは別の存在であるとの意識を高めることにつながったのかもしれない。そのため、子供を《親と独立した存在》としてとらえる傾向が母親で高くなるという結果をもたらしたと考えられた。

さらに、専業主婦は育児ストレスも高いという先行研究の結果から推測すると、本研究の母親達も育児ストレスを強めている可能性が高く、そのことが子供に対する《負の心理的価値》を父親よりも強く抱かせる結果となったと考えられた。

逆に、父親の記述数が母親よりも多かったカテゴリー群は《心理的価値》《親との繋がり》の2つである。この2つのカテゴリー群に見られる記述の特徴は、子育ての実体験に基づいて具体的、身体感覚的に子供を定義しているというよりも、子育てを離れた第三者的な視点から子育てを分析的に捉え検討することによって、抽象的、観念的に子供を定義しているという点であった。そのことから、育児関与度が低く直接的に子供と触れあう機会を十分に持てない父親達は、母親よりも子供という存在をより観念的にとらえ、定義しようとしている可能性が考察された。

ただし、今回の調査は対象者の自由記述をもとにした質的な分析が中心であり、育児関与度、育児ストレス等の測定は行っていないため、ここで述べた結論はあくまでも推測の域を出ない。今後の課題としては、今回の結果を踏まえ、子供の定義に関する尺度を構成するとともに、育児関与度や育児ストレス等の変数も組み入れた複合的な調査が必要であると考えられる。

引用文献

- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達 ―生涯発達の視点から親を研究する試み―. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子供の価値 ―今、なぜ子を産むか―. 教育心理学研究, 47, 170-179.
- 森下葉子 2006 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達研究, 17, 182-192.
- 永久ひさ子・柏木恵子・姜蘭恵 2004 父親における子供価値と子供を持つ負担感 ―日韓比較研究―. 文京学院大学研究紀要, 6, 43-59.
- 新谷由里子・村松幹子・牧野暢男 1993 親の変化とその規定因に関する一研究. 家庭教育研究所紀要, 15, 129-140.
- 高橋道子・高橋真実 2009 親になることによる発達とそれに関わる要因. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 60, 209-218.
- 若松素子・柏木恵子 1994 「親になること」による発達 ―職業と学歴はどう関係しているか―. 発達研究, 10, 83-98.
- 山口雅史 1997 いつ、一人前の母親になるのか? ―母親のもつ母親発達観の研究―. 家族心理学研究, 11, 83-95.
- 山口雅史 2001 親同一性を構成する3つの次元 ―幼児期の子供を持つ母親における親同一性の構造―. 家族心理学研究, 15, 79-91.
- 山口雅史 2003 子供優先度及び育児効力感が母親同一性形成に及ぼす影響. 愛知教育大学研究報告, 52 (教育科学編), 39-44.
- 山口雅史 2004 “親である”ってどういうこと? ―母親を対象とした親であることの意味に関する考察―. 愛知教育大学研究報告53 (教育科学編), 47-52.
- 山口雅史 2006 幼児の父親を対象とした“子育て”の意味に関する調査. 愛知教育大学研究報告55 (教育科学編), 29-34.
- 山口雅史 2017 幼児の父親が抱く子供の意味と価値. 椋山女学園大学人間関係学研究, 15, 95-103.